

文 章 表 現

——古典解釈を通して——

高 橋 俊 和

は じ め に

我々が文章を書くという行為は、頭の中にある一つの思考を文字に定着させ、その思考内容を整理し、また他者にわかりやすいように効果的に構成することである。自分だけが、なんとなく漠然と考えて了解している状態とは異なり、自分の主張したいことを明確にし、さらにそれを享受者にうまく伝達できるかどうかは、その文章表現の出来具合によって決まってしまう。自分の思いを明確にすること自体、頭の中で文字化こそしないが、文章表現をしていることである。頭の中でまとめられた主張・見解といったものが外に出される時、そこに具体的な文字化という文章表現が要求される。文章表現の難かしさは、前者の主張・見解のまとめという一面と、さらにそれを如何に明快な表現として文章化するかという一面の両方を兼ねているところに起因するであろう。その難かしさを克服しようと、各出版社の「国語表現」では様々なアプローチを試みている。そうした中で、課題作文的なものではなく、一つの材料を提示しそのまとめと文章表現をさせる方法を本稿で取りあげてみたい。少し欲ばって、ここでは材料を古文に取った。各出版社の「国語表現」の中では、東京書籍だけが「古典との対話」という項で古典（枕草子と徒然草）をとりあげている。古文の読解と文章表現、一石二鳥をねらうものだが、なかなかうまくは運んでくれない。以下述べるところは、一年生の習熟度別授業で扱った古文解釈の時間での一つの実践報告である。

—

習熟度別授業は、週一時間で六月からスタートしたものの、行事でかなりつぶれ実質五時間ほどしかとれなかった。これとは別に文語文法(動詞・助動詞)を、生徒は四月五月の二ヶ月間に大ざっぱに履修している。

教材は、作者未詳の中世の物語『転寝草紙』を使った。これを使った理由は、短篇であること、単純な恋愛物であって興味をそそられるということ、群書類従本以外に翻刻がなく、辞書しか頼るものがないということ等にある。そのあらすじは以下の如くである。

おおやけの評判もよい大臣に、今の東宮大夫や石山寺の座主など多くの子がいた。その中でも石山の座主と母を同じくする美しい姫君を、父の大臣はことのほかかわいがっていた。宮仕えの年頃になっても心配が先に立って、なかなか手放すことができない。そのようなある日のこと、春雨がもの静かに一日中降りつづいて、何となく寂しい気分の昼つかた、姫君は琴を弾いているうちに、うとうと眠りに誘われた。うたた寝の夢の中で、藤の枝に結びつけた手紙を受けとり、それには男の手で、「思ひ寝に見る夢よりもはかなきは知らぬうつつのよその面影」と心をこめて書きつづってある。姫君は誰からの手紙だろうと胸をときめかしているうちに夢からさめてしまった。その夜は手紙のことが気にかかって心も晴れない。近くの御几帳をひき寄せてやすむと、傍らに立派なお召し物の男が添い臥している。驚いて見ると、あの昔語りの光源氏の君も、かくやと思われるほどの魅力的な男であった。男は姫君の手をとって、御返事をいただけないのでこのように参りましたと伝え、その夜を姫君とともに過ごした。夜明けを告げる鶏の声をほのかに聞き、姫君は夢見心地のまま起きるので

あった。

それからというもの、いったい誰の幻が自分の夢の中に現れたのかと思い悩んで、寝ても覚めてもその男に恋いこがれる。月日のたつにつれて病気がちになり、体も衰弱してしまった。父の大臣や乳母たちは心配して様々の祈りや誦経などをし、兄の僧都もこのことを聞いて石山詣でをすすめた。数多くの祈禱のご利益があったのか、すこし快方にむかったので、姫君は兄のすすめた石山寺に親しい女房四・五人を連れて参詣した。深刻な様々な身の愁いを観音に申しあげ祈禱すると、心も洗われる思いであった。

お勤めも終わり、紫式部が源氏物語を執筆したとかいう部屋の隣にいと、その部屋から宰相の中將と左大將の声が聞こえてくる。耳をすますと石山寺参籠の理由を尋ねられた左大將の声が聞こえてくる。その声に聞きおぼえがあり、胸さわぎがしてものかけからのぞくと、しなやかな狩衣姿におやつしになった左大將殿の姿は、まさしく夢の中に出てきた男であった。左大將が言うには、去年の弥生の末ごろに女のもとから、「たのめただ思ひあはする思ひ寝のうつつかへる夢もこそあれ」という藤の枝に結びつけた手紙をもらって以来、二年ばかり夜ごとの夢の中で逢う瀬を重ねてきたが、ほんの一瞬であってもよいから、現にこの女に逢いたいものと心にかけ、思い煩い、体もひどく衰弱してきたので観音に祈願することにしたということである。これを聞いて姫君は今すぐ障子を開けて名のろうと思うのであったが、しかし女の身ではできかねる。姫君は、あれこれ迷ったあげくに家を出る決心をして、父の大臣に遺す歌をしたためる。「なげくなよつひには誰も消えはてん小萩が露のあだし命を」。

翌日姫君の一行は石山寺を後にする。瀬田の橋に来て、姫君は親に先立つ罪深さを思いながらも、橋の中ほどで突然川に身を投げた。連れの者達は一瞬のできごとに驚きあわてて、涙を流している余裕もない。ただ、なんとしても大切な姫君を救いあげようと声を限りに泣きまどうばかりであった。

折りしも狩衣装束の男達を乗せた舟が、この光景をいぶかしく思っけて寄って来て、姫君を助けあげた。不思議なことに姫君は、袖以外ほとんどぬれていなかった。この舟は、あの左大將が石山籠りを終えて帰る途中のものであった。こうして姫君と左大將ははじめてほんとうに対面することができたのである。姫君の可憐で愛らしい様子といったらなく、見慣れた夢の中での出会いのおかげで初対面という感じもなく、心ゆくまでお話しになった。

二人の仲は、実は月日を重ねての前世からのものであり、畏れ多い仏の縁で結ばれたのでその後はあれこれの物思いもなく、末長く幸せに暮らしたということである。

いたって健全な恋愛譚である。この比較的容易な内容の短い物語を使い、解釈を通して文章表現を試みようというわけである。

まず、生徒には上述の梗概と『転寝草紙』の原文だけを配り、第1時限で扱う範囲を指示しておく。次にその梗概をよく読ませ、あとは細かい指示を一切しないで、辞書をとにかくひかせる。それでも理解できない部分は空けておくようにする。大ざっぱなこの作業の一例をあげてみよう。(女子生徒の一例)

原文　これは近き世のことにやあらん。おほやけの御おぼえもいとあしからで
生徒訳　(これは近い世のことだろうか。宮中の評判もたいへん悪くなくて)
ときめく人の、おはしけるおとこ君は、今の東宮の大夫ぞかし。
(えらい人のいらっしゃった) であるよ。

だ姫様お一人で、父の大臣はことさらこの方をかわいがられて、大臣は宮中の宮仕いなどへとお思い急ぐ折もあるが、娘が女御更衣の数多い中につかえられて、もし天皇に寵愛されたら、人のねたみがおそろしく、またひかえめで勢いに圧倒されるようで、彼女が物思いに沈みがちになるのも気の毒で、大臣があれこれとためらいなさるに、自然とまた、しかるべき人々が迎えとって大切にしようと、むりになさることもあるが、並の人にもやはりかわいい容ぼうなので、とかく願いためらうほど、娘がしだいに御盛りのころになっていくにつけても、いっそいやなところなく輝きまし、ほんとうにつれそうねうちがあるようだ。)

二

辞書のみで書かせた最初の訳と比較して、細かい部分の問題点はあるものの一通り話の筋はできている。ここでその細かい点を逐一指摘し、訂正していくのが古文の授業のあり方の一つであろう。しかし筋が一本通ったところで、それを土台にし、わかりやすい文章表現を少し類推も混じえてすることにより、逆に理解できなかったところが理解できるようになることが期待できるかもしれない。文語の直訳らしきものから、口語文へのそれも推敲である。その際に次のようなことを注意した。

1. できるだけ主語をはっきりさせる。
2. この物語は一文が長いので、いくつかの短文にする。
3. 物語であるから、読者への敬意を含んだ敬体の文章「です」「ます」体にする。
4. 前後の文脈を考えて、不自然でない言葉使いをする。
5. 誤解の起こらないように、句読点をしっかり打つ。

以上の点に留意し、上述の二回目の直訳を日本語の文章らしい口語文に改めさせた。どうしてもはっきりと理解できていない部分は、前後の文脈から想像して書くようにと指示してある。さて、同じ生徒の文章表現である。

これは最近のことだったように思いますが、宮中の御評判もそう悪くもないある偉いの方がいらっしゃいました。この方の男のお子様は、今の東宮大夫であられます。その弟の、なんとかの僧都の御兄弟に姫君がお一人おられました。女のお子様はこの姫君ただ一人でしたので、父の大臣はことさら姫をかわいがられました。大臣は、姫を宮中へ宮仕いに出そうか、とお思いになる折もあったのですが、姫が女御更衣の数多い中でいっしょにつかえられ、もし天皇に寵愛されるようなことがあったら人のねたみがおそろしく、ひかえめな姫が周囲の勢いに圧倒されて物思いに沈みがちになってしまうかもしれない、それともたいへん気の毒だ、とあれこれとおためらいになるのでありました。また自然と、どこかの立派な男の方が姫を嫁にしたい、そして大切にしていあげよう、と無理やり求婚なさるようなこともあるだろう、また並の人にとってもやはりかわいらしい姿かたちであるからなあ、とかと、とかく心配なさるのでありました。そうしていくうちに姫は次第に御盛りの頃になられ、いっそい非のうちどころなく輝きをまし、それは本当に誰もが嫁に迎えたいと思うほどでした。

言葉使いの中に、「御評判」とか「御盛り」などというあまり使いなれない原文にひきずられた言葉も使われてはいるが、二回目の訳よりは全体として話の内容がわかりやすく表現されている。後半の部分、とくに文末の一文は原文を少し離れ、ある程度の想像がもち込まれては

いるものの、かえって具体的で説得力があるようにも思われる。

以上までの過程で五時間ほど費している。取り扱った箇所であれくらい多くの時間をとったのでは、いくら短篇とはいえ問題がありそうだが、最初の場面で、前述したようなやり方や補足説明をしておけば、後は同じようなパターンのくり返しであるからもっと時間は短縮できるはずである。

三

「国語表現」の一方法として、古文の解釈を通しての文章表現のあらましを述べてみたが、その意味と問題点について考えてみようと思う。一般に「表現」といった場合、我々の脳裡に浮かぶことは「作文」ということである。情報化社会にあって、自分の考えを文字にして表現することが少なくなり、電話などに代表されるように多分に「会話」という表現が主流を占めつつある。ところが、その「会話」もしくは「対話」ですら自分としては理路整然と言ってるつもりであっても、それを文字にし文章にしてみるとかなりいい加減なものであることがわかる。講演会でも、きいていて話している内容がよく理解できるという場合、録音したテープを文字にしてみると、見事に文章になっている。一般に文芸評論家の会話は上手である。なぜか、それは自分の見解をいかに他者に伝達し、納得させるかに自分の仕事がかかっているし、そしてまた、普段から自分の見解を表現（文章化）することに慣れているから、話をする場合でも頭の中で文章が整然と構成されるのであろう。つまり、会話という表現でも、その基礎には文章表現があるということである。生徒と話をしていて、話し方が下手だと感ずることがしばしばだが、下手な生徒は話したいことの単語は見つかるけれどもうまく表現できない（文章が構成できない）ので、なんとなく以心伝心の要素をまじえて極端に言えばフィーリングで会話をしている。これでは事柄の細かい点は、正確に他者に伝わらない。こうした現状をふまえて、新課程では「国語表現」をとりあげたとも思える。そこで「作文」ということになるのだが、生徒は作文をあまり書きたがらない。理由は様々あるであろう。読書量の少なさによる語彙不足からかもしれない。書き慣れていないことからくる拒否反応かもしれない。とにかく、積極的に書こうという意欲はほとんどの生徒がもっていない。他の教科が一般にそうであるように、受身的な学習姿勢が定着したことの現れではないかとひそかに私は思っている。そうした文章に関して受身的な生徒に、例えば題を与えて作文を書かせても、あまり多くは望めないような気がする。どうしても今の生徒には、文章を書くよりどころが、まず第一に必要であろうし、そこでの訓練が必要であろう。そのよりどころは、現代文でも古文でも漢文でもいい。それを一つのたたき台として、自分の見解を文章として表現できるようになればいいのである。全く新しい分野としてとりあげられた「国語表現」というものを、在来分野の応用・発展という形で考えると意外に扱いやすい分野でないかと考える。一で概説した古典の解釈を通しての文章表現も、その意味ではそうしたものの一例となりうるのではないかと考えている。

さて、古文を例にとってみよう。従来の授業形態は、一方では文法事項の体系的学習と、それを利用しての作品の解釈が一般的なやり方であろう。それはそれで十分意味はあるし、またそういうやり方が常道であると思う。しかし、古文を解釈する場合、文法、語彙、有職故実、風俗習慣、歴史的背景、文学史等の知識をもてばもつほど解釈は容易になるが、一年二年生の段階では、これを生徒に要求してもあまり多くは望めない。そこで、文法は文法、解釈は解釈と別仕立てのものとして生徒は考えがちである。これもある意味では仕方のないことかもしれない。文法は面白くないということになる。そこで、どうして文法等の知識が必要なのかとい

うこと（その場で必要な文法知識）、また一つの言葉が前後の文脈との関係でどういう意味あいの語としてあるか、そうしたことが自分で訳を作ってみる（書いてみる）ことで、かなりはつきりしてくると思う。具体的文章に触れ、その中で疑問をもち、その疑問点を調べることのくり返しの中に、訳の記述を入れることによって、文法・言葉等が生きたものとしてあるということが実感できるのではなかろうか。

このような読解についての基本的な考えのもとに、今度は直訳したものを日本語らしい口語文に改めてみる。そうすることの意味の一つは、「……するところの……」に代表される英語の訳のまずさが、国語の、とくに古文の訳にもあてはまるということを認識し、それを是正することにある。とくに、ここで扱ったような一文が長いものになると、余計そうした面があらわれてくる。内容が正確に把握されているかどうかは、他者にそれをわかりやすく説明できるかどうかと表裏をなすのではなかろうか。つまり、他者にわかりやすい表現ができないということは、自分自身が内容を十分把握していないということである。また、もう一つの意味は、直訳は所詮借物であるから、内容を日常我々が使っている言葉使いで表現した場合、ぎこちなさが抜け、ある場合には前後の文脈から不明な箇所が類推をともなって理解できることがあるということである。例えば、生徒の二回目の直訳文とその後の口語について比較してみられたい。とくに後半の部分についてみると

原文 「あながちにものし給ふこともあれど」

直訳 「むりになさることもあるが」

口語文「無理やり求婚なさるようなこともあるだろう」

例えばこの部分は、「ものす」という婉曲表現の代動詞が、口語文で、その前からのつながりで、「求婚」という言葉に置きかわっている。

また、次の部分

原文 「とかくおぼしたゆたふほどに、やうやう御盛りのほどにもなりゆくにつけても、いとどあかぬところなく光そひ給ふぞ、げにみるかひあめる」

この部分は、私どもが訳すとしたら次のようになるであろう。

「大臣が、ついお思い迷っていらっしゃるうちに、だんだんお年頃におなりになっていくにつけても、全く申し分なく輝かしくおなりになるのは、まことに見ごたえもあるようです。」

生徒の二回目の訳を見てみよう。

「とかく願いためらうほど、娘がしだいに御盛りのころになっていくにつけても、いっそいやなところなく輝きまし、ほんとうにつれそうねうちがあるようだ」

これを、直訳を参考にし他人にわかりやすく表現することを意図して書かせると

「（大臣は）…とかく御心配なさるのでありました。そうしていくうちに姫は次第に御盛りの頃になられ、いっそ非のうちどころなく輝きをまし、それは本当に誰もが嫁に迎えたいと思うほどでした」

原文の意図するところといささかくい違いはあるものの、前述の私の訳などよりははるかに文章が生きているし、わかりやすい。こうしたことを考えると、古文にまだ馴染めない一年生などには、がんじがらめの直訳体ではなく、大筋の把握が間違っていない範囲内での創作の世界をもたせることに一つの意味はあろうと思う。

ただし、問題がないわけではない。教師側がどの程度手を入れたらよいのかという問題である。説明しすぎては文章表現させる意味はないし、かといって全く時間だけ与えて何回か書か

せても意味はない。生徒個々人によっても力は異なる。この判断が難しいということ。さらに一年の段階では作品の内容が比較的容易な短篇であることが要求される。また、それに付随したこととして作品がある程度限定されるということもある。東京書籍は、その意味で随筆（徒然草、枕草子）の一部をとりあげている。『竹取物語』・『御伽草子』・説話のたぐいなど、内容のわかりやすいもの、あるいは前もって話の内容を知っているものなどが使えるだろう。その他、細かい点の指導ということでは、まばまだ問題は山積みされている。これらはもっと時間をかけて解決していきたいと考えている。ただ、本稿で述べたかったことは、「国語表現」というと即現代文の範囲で扱いがちであるが、従来の古文・漢文であっても、やり方によっては表現というものとうまくかみあう点があり、逆にそうした古典の読解にも役立つのではなかろうか、もっと古典というものを表現の中に関連させてはどうかということである。教科書での古典離れの昨今、こうした方法があってもいいのではなかろうか。

文章表現についてはなはだ稚劣な文章になってしまった。御容赦願いたい。

（注）『転寝草紙』は、川口久雄先生のもとでの読書会のテキストに使ったものである。